

尾上圭介教授を送る

月本 雅幸

本研究室の尾上圭介教授には平成二十四年三月三十一日付をもって東京大学を停年退職されることになった。同年三月十七日には同教授の最終講義が予定されているが、この『日本語学論集』においても、本年度国語研究室の主任を務める月本が拙い一文を記して同教授への感謝の辞とすることをしたい。

尾上圭介教授は昭和二十二年九月十六日大阪市のお生まれ、昭和四十七年四月に東京大学文学部国語国文学専修課程を卒業された。同年四月に東京大学大学院人文科学研究科修士課程に進まれ、昭和五十年三月同課程修了の後、同年四月東京大学文学部助手となられた。昭和五十二年四月からは神戸大学文学部に助教として勤務されている。本学には平成元年四月に文学部助教として着任され、平成七年四月からは大学院重点化に伴い大学院人文社会系研究科助教となられ、平成十八年一月には教授に昇任されている。本学には通算して二十三年間在職されたことになる。

御専門は日本語文法、特に言語表現の文法構造とそれが結果として持つ意味、表現性との関係を論理的に明らかにすることを課題とされて来た。御著書には単著に『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版、平成十三年）、『大阪ことば学』（創元社、平成十年・講談社文庫、平成十五年・岩波現代文庫、平成二十二年）、編著に『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』（朝倉書店、平成十六年）、また論文多数がある。

また、この間日本語文法学会副会長、日本語学会評議員、日本語学会委員、日本笑い学会理事などを務められた。

尾上先生（以下、このように呼ぶことをお許し願いたい）に初めて私がお会いしたのは昭和五十年四月、同先生が研究室の助手になられた時であった。当時私は学部三年生で駒場から本郷に進学したばかり、先生の御専門の領域のころなどはろくに知る由もなかったが、それでも先輩方から尾上先生が既に現代日本語文法という新たな研究領域の最先端に行く研究者であり、若手の希望の星であるという話

を度々お聞きした記憶がある。前述の略歴から明らかなように、先生は大学院修士課程を終わられたばかりで博士課程を経ずに助手となられ、僅か二年で神戸大学文学部助教授として赴任された。その折の颯爽たるお姿を今なおよく覚えてゐる。その後の御活躍については私などが改めて説明するまでもないであろう。

また、先生は大阪市のお生まれであることから、大阪の言葉に造詣が深く、前述の御著書『大阪ことば学』は版元を変え、増刷を重ねて多くの人々に読まれている。

平成四年四月に私は本学に着任し、先生と久しぶりにお会いすることとなった。勿論その間も学会等でお会いすることはあつたし、神戸大学で学会が開催された際、神戸市の御自宅にお邪魔したこともあつたが、同じ職場で先生の教師としてのお仕事振りを拝見するのは初めてであつた。そして二つの点で私は大いに驚かされたものであつた。

まず第一には先生が常に御自身の学問の最先端を講義で開陳されたことである。私は講義を拝聴する機会がなかったが、聴講した学生の話によれば、先生の御講義は熱心の余り時間を大幅に超過し、次の時限に食い込むこともしばしばであつたらしい。それどころか、一時限一〇〇分の枠を二つお使いになることもあつたと聞いている。着任したばかりの私には、これまで経験のない一〇〇分授業をコマコマこなすだけでも精一杯であつたので、その二倍の内容を

お話しになる先生のあり方が途方もないものに思われたことであつた。

第二には、先生の学生に対する指導が学問的に厳しいものであつたことである。単に学生に対して厳しい教師はいくらもいるのであろうが、先生の厳しさはまずは御自身の学問に向けられ、それと同じだけの厳しさが次に学生に向かうというものであつたのだろうと私には感じられた。それだけに学生にとつては自分の不十分さについて弁解の余地はなかつたのであろう。しかしそれでもなお、先生の学問に魅力を感じ、憧れて聴講し、指導を受ける学生は多かつたのである。

こういふ先生にも意外な一面があつた。それは学生の性格などについて、実に鋭い人間観察眼をお持ちであることである。この学生は一見ああ見えるが実はこういうタイプなのだ、などというお言葉をうかがつて、後で納得することもしばしばであつた。私は先生の学問の高さと深さはついに学び得なかつたが、お教え頂いたことを日々の学生指導に生かさせて頂いている。

二十年間御一緒させて頂いた先生とお別れするのはまことに名残惜しいことではあるが、先生の今後のますますの御研究の進展と御健康をお祈りし、感謝の辞としたい。

(つきもと まさゆき 大学院人文社会系研究科 教授)